

# 獨協学園と音楽

## —創立 120 周年に寄せて—

木村佐千子

本年、獨協学園は創立 120 周年を迎えた。「ドイツ文化を移植する目的で」<sup>1)</sup>創設された本学園は、創立以来、ドイツの音楽とどのように関わってきたのだろうか。また獨協学園構成校における現在の音楽をめぐる状況はどのようなものだろうか。本稿では、明治から第 2 次世界大戦頃までの獨協学園と音楽をめぐる歴史をたどったあと、創立以来 120 年の本学園の対外的音楽活動、音楽系の部活動、音楽教員と授業、音楽関係の職に就いた卒業生、校歌について資料をまとめ、論じていきたい。なお、本研究にあたっては、主に以下 5 つの書籍を参照した。

- (1) 天野貞祐監修『獨協七十年』東京：獨協学園、1953（昭和 28）年。[脚注では『七十年』と略す]
- (2) 七十五年史編集委員会編『獨協學園七十五年史』東京：獨協学園、1958（昭和 34）年。[同、『七十五年史』と略す]
- (3) 獨協学園百年史編纂委員会編『目でみる獨協百年 1883–1983』草加：獨協学園、1983（昭和 58）年。[同、『百年』と略す]
- (4) 獨協学園百年史編纂委員会編『獨協学園史 1881–2000』草加：獨協学園、2000 年。[同、『学園史』と略す]
- (5) 獨協学園百年史編纂委員会編『獨協学園史 資料集成』草加：獨協学園、2000 年。[同、『資料集成』と略す]

\*\*\*

---

1) 『七十五年史』、59 頁。

## 明治、洋楽導入期

明治初年、ドイツといえばまず医学の国というのが日本人のドイツに対するイメージであった。しかし、明治政権が法整備を進める段階で、判例中心で煩雑なイギリス法体系、フランス革命以来の主権在民の民衆の立場を貫くフランス法体系より、上からの立憲君主制に依拠するドイツ国家学説が活用されるようになった。そして、明治憲法は、ドイツ人顧問ロエスレルの草案をもとに伊藤博文、井上毅らによってまとめあげられたものである<sup>2)</sup>。このことを契機に、近代化を進める日本にとって、従来より重きをなしていた英・仏両国に対抗し、ドイツ帝国の姿が大きく映るようになり、改めてドイツ文化を全体としてとらえ直そうとする気運が高まった。そうしたなかで、「ドイツの政治・法律を中心に獨逸学を総合的に考究しようとする獨逸学協会」<sup>3)</sup>が1881(明治14)年に誕生した。同協会が「獨逸学協会学校」を設けるのがその2年後、1883(明治16)年のことである。獨逸学協会学校の設立は、ドイツに強い関心を寄せ始めた当時の日本全体の気運とも合致して歓迎され、宮内庁から下賜金を受けるなど、順調なすべりだしであった。事実、獨逸学協会学校からは、重要な法学者・医学者となる人物が数多く巣立っていった。

獨逸学協会学校では、「智識偏重をさげ、受験優先を否定」する理念をもち、「全人格的完成をもとめて、智・徳・体の総合的教育の実現」を目指した<sup>4)</sup>。西欧、特にドイツ古典音楽への関心は教師、生徒ともに強かったというが<sup>5)</sup>、初代校長大村仁太郎が欧州出張時に書状にて音楽部設立を提案し、「日本ではじめての洋学<sup>6)</sup>管弦楽器を導入した音楽部」<sup>7)</sup>が1903(明治36)年に結成された。当時の学友会規則によれば、文化系の部としては、口演部、雑誌部、絵画部、音楽部の4部が活動していたようである<sup>8)</sup>。

2) 『学園史』、135～136頁。

3) 『学園史』、136頁。

4) 『学園史』、617頁。

5) 『学園史』、618頁。

6) 「洋楽」の誤りか。

7) 『学園史』、664頁。なお、慶應義塾のワグネル・ソサイエティーの創立は1901(明治34)年であるが、設立当初は合唱のみであった。

8) 『学園史』、617頁。

この音楽部は、「優雅高尚なる精神で修養するをもって」目的としていた。音楽部の設立にあたっては、ヴァイオリン 10 挺、太鼓や笛が各 1 個、附属の楽譜台、楽譜等が新調された<sup>9)</sup>。また、ピアノは大講堂に置かれていたグランドピアノを使用した。「唱歌」(声乐)と「ヴァキオリン」の 2 科に分かれ、「時々小演奏会を開き、また 1 年に 1 回大演奏会を開く」と学友会規則にある<sup>10)</sup>。正課ではなく部活動というかたちではあったが、管弦楽の教育実践は、中等教育として当時、最も先駆的なものだったと評価できる<sup>11)</sup>。卒業生の颯田琴次は、在学当時の学校をふりかえり、「独逸語は勿論、音楽、文学の方面でも社会の先端」を切っており、「中学校で明治廿、三十年代にグランドピアノをもっているなんてはおそらく全国になかった」と回想している<sup>12)</sup>。のちに医学者・音声学になるこの颯田琴次も、獨逸学協会学校の音楽部でおおいに活動したことが契機で、東京音楽学校のピアノ選科に進んだという。同じ頃の生徒に本居長世がおり、獨逸学協会学校を 1901 (明治 34) 年に中退して東京音楽学校に進み、童謡《十五夜お月さん》(1920 年)、《通りゃんせ》(1921 年)などの作曲家として今日に知られる。なお、日本で最初に西洋の軍楽が伝習(レッスン)されたのが 1869 (明治 2) 年であるが、最初は吹奏楽のみであり、弦楽が伝習され始めたのは 1879 (明治 12) 年のことである<sup>13)</sup>。東京音楽学校は 1887 (明治 20) 年に設立された(前身の音楽取調掛は 1879 年設立)。また、帝国大学初の管弦楽団である九州帝国大学フィルハーモニー会の創立が 1910 (明治 43) 年前後<sup>14)</sup>、東京帝国大学音楽部管弦楽団の創立が 1920 (大正 9) 年である。このようなことを考えあわせても、獨逸学協会学校の部活動で 1903 年の設立当初か

9) 『学園史』、618 頁。同書の 664 頁によれば、チェロも所有していたようである。

10) 『学園史』、618 頁。

11) 「獨協の音楽教育は、当時全国最先端であった」という齊藤博の言葉が『資料集成』217 頁にある。

12) 『七十年』、129 頁。

13) 近衛秀健「Gradus ad Parnassum」『獨協大学ドイツ学研究第 48 号』草加：獨協大学外国語学部ドイツ語学科、2002 年、121 頁。

14) 1910 年に九州帝国大学が設置されたが、それ以前の 1909 年から「フィルハーモニー会」が活動を行っていた。九州帝国大学のフィルハーモニー会としての第 1 回演奏会は 1911 年のことである。現在の名称は九大フィルハーモニーオーケストラ。

ら管弦楽が扱われたのは、先駆的と言える<sup>15)</sup>。

それでは、この頃の獨逸学協会学校の音楽教育を担ったのは、どのような人々だったのだろうか。1893（明治26）年から1905（明治38）年まで音楽教師を務めた大村恕三郎は、初代校長・大村仁太郎の弟。雅楽師でありヴァイオリンの名手であった。大村恕三郎がヴァイオリンの名手であったことから、創立当初の音楽部においてヴァイオリンが10挺新調されるなど、ヴァイオリン演奏が重視されたのであろう。大村恕三郎は、退職後の1906（明治39）年、大阪に転じ、日本最初の女子音楽学校である大阪女子音楽学校（後の相愛女子大学音楽学部）の創設に参加した<sup>16)</sup>。1899（明治32）年から1906（明治39）年まで教えた東儀鉄笛（本名：季治、1869年生～1925年没）は、宮中雅楽師の家の出であり、「東儀家など宮中雅師は鹿鳴館時代、西洋楽器で生演奏していた」<sup>17)</sup>という。東儀鉄笛の指導のもと、1900（明治33）年の大正天皇のご成婚のお祝いの会に、生徒たちがドイツの軍歌を歌った<sup>18)</sup>。東儀鉄笛は、早稲田大学校歌《都の西北》（1907年）の作曲者でもあり、シェイクスピアを演じる新劇俳優・演出家としても多彩な才能を発揮した。なお、東儀鉄笛は、退職後の1910（明治43）年から『音楽界』という雑誌に「日本音楽史考」を書いており（未完）、これは近代的な日本音楽史の記述の嚆矢であるという<sup>19)</sup>。東儀鉄笛のあとをうけて1906（明治39）年に音楽教師に就任し、1915（大正4）年までつとめた東儀俊龍は、やはり宮中雅楽師でありながらヴァイオリンの名手であった

15) 「唱歌」については、1880年代末頃から小学校での教育が開始され、1890年代に、ほぼ日本全国の小学校で唱歌教育が普及していった。

16) 『学園史』、829頁。

17) 『資料集成』、217頁。明治期の雅楽師たちが西洋楽器を習得していった様子については、近衛秀健の以下の論文に詳しい。「Gradus ad Parnassum」『獨協大学ドイツ学研究第48号』105～143頁、および「Gradus ad Parnassum II」『同第49号』、41～74頁。

18) 『七十五年史』、114頁。同書113頁には、東儀先生の音楽の試験に関するエピソードが記されている。

19) 『学園史』、829頁。平野健次の言。

と伝えられ<sup>20)</sup>、獨協音楽会を主催したという<sup>21)</sup>。獨協校歌はこの東儀俊龍によって1903(明治36)年前後に<sup>22)</sup>作曲された(作詞は志田義秀原作、芳賀矢一校訂<sup>23)</sup>)。同じ東儀家の音楽家によって作曲された早大校歌との近親性が指摘されている。

このように、獨逸学協会学校は、すぐれた音楽教師を擁し、洋楽導入期の日本において、西欧、特にドイツ音楽の演奏と普及に積極的な役割を果たしたと言える。また、このように本格的な音楽教育が行われたということが生徒の情操教育に果たした役割は計り知れない。

### 戦時中、国歌を中心とするドイツとの音楽交流

その後の獨協学園は、ドイツ国との関わりから、ドイツの盛衰、日独関係に対応するかたちで興隆期・衰退期を繰り返す。第一次世界大戦でドイツが敵国となり、また敗退したときには、学校存亡の危機となったという<sup>24)</sup>。逆に、第二次世界大戦時には、日独伊三国同盟が結ばれ、友好国ドイツの名を冠する獨逸学協会学校は、脚光を浴びた。たとえば、1937(昭和12)年2月18日、ドイツ海軍の巡洋艦エムデン号が横浜に入港したとき、靖国神社に参拝した青年乗組員を、ナチス第三帝国の国旗であるハーケンクロイツの旗を手にした獨協中学の全校生約600人がドイツ国歌を斉唱して歓迎した。このことは、日独の新聞各紙に大きく報じられ、獨協の存在を世人に強く認識させた<sup>25)</sup>。また翌

20) 雅楽師である大村恕三郎、東儀鉄笛、東儀俊龍の三人が、西洋楽器を用いた演奏を祝賀会等でもに行っていた記録が、近衛秀健の論文に挙げられている。「Gradus ad Parnassum II」『獨協大学ドイツ学研究第49号』、60～62頁。

21) 『資料集成』、219頁。

22) 『百年』、102頁。

23) 『百年』、166頁。

24) 評議員であった額田豊は「ドイツ国は亡ぶともドイツ文化は決して衰えないだろうから是非とも本校を存続すべきだと強調した」(『七十年』、122頁)し、生徒だった内村祐之は校内の学芸大会で「ドイツは亡びてもドイツ文化は永久に亡びないという趣旨の」(『七十年』、152頁)弁論をドイツ語で行ったという。

25) 『学園史』、747頁。『七十五年史』の57頁では、「日独両国旗を」ふったとされている。

1938 (昭和 13)年 9 月 27 日には、ヒットラーユーゲントが獨逸学協会学校に  
来訪し、「燦たり輝くハーケンクロイツ」の歌を歌って歓迎したという<sup>26)</sup>。同年  
4 月 6 日に芝田村町飛行館で行われた獨協アーベント(文化演芸会)においては、  
在日ドイツ少年少女がヒットラーユーゲントの歌を歌った。

大戦下の獨協で教鞭をとったドイツ人教師に、ヤコブ・ザールがいる。1927  
(昭和 2) 年から没する 1941 (昭和 16) 年まで獨協でドイツ語を教えた<sup>27)</sup>。ヤ  
コブ・ザールは「音楽教師はだしの美声」<sup>28)</sup> (テノール)をふるってドイツ・  
リートの授業を行い、生徒にとって目新しくも楽しい経験であったと伝えられ  
る。「荒れ果てた校舎の中で歌われるザール先生のシューベルトやブラームスの  
歌曲は、少年たちの耳の底に深く残り、悲惨な第二次世界大戦のながい風雪に  
耐えた」<sup>29)</sup> という。また、ザールによる指導が実って、1940 (昭和 15) 年、ド  
イツ語科 4、5 年有志と大森の在日ドイツ人学校生とが、当時、愛宕山にあった  
ラジオ放送局 (JOAK) で日独唱歌をそれぞれ両国語で合唱したのが放送され  
たこともあるという<sup>30)</sup>。ヤコブ・ザールの亡き後、昭和 18 年まで妻のゲルタ・  
ザールが後任としてドイツ語教師を務めた。ゲルタ・ザールも、シューベルト  
歌曲を美しい声で歌ったという<sup>31)</sup>。

また、この頃のドイツ国との関係をうかがわせるエピソードとして、1936  
(昭和 11) 年、第 8 代司馬校長の亡き後、「司馬亨太郎先生追慕記念会」が組  
織されたところ、同記念会を通じ、いち早くドイツ大使館から獨協にレコード  
15 枚が寄贈されたという<sup>32)</sup>。ドイツ大使館との音楽をめぐる関係は今日まで続

26) 『七十年』、198 頁。

27) 『資料集成』の 224 頁では、退職が昭和 3 年となっているが、誤りであろう。

28) 『学園史』、769 頁。

29) 『百年』、94 頁。

30) 『学園史』、769 頁。

31) 『学園史』、755 頁。なお、『資料集成』の 224 頁では、就任が夫と同じ昭和 2 年と  
なっている。

32) 『学園史』、747 頁。『七十年』の 48 頁では、「獨逸国政府より」寄贈を受けたとあ  
る。また、このとき一層の研究と普及に貢献すべく獨逸文化室が校内に設けられ、  
「司馬チムメル」[筆者注、Zimmer = 部屋の意]と名づけられたという。

いており、2002（平成 14）年と 2003（平成 15）年、駐日ドイツ大使主催の公邸でのパーティーに獨協大学管弦楽部が招かれ、演奏を披露した。

### 対外的音楽活動

獨協学園の対外的な音楽活動としては、1933（昭和 8）年 6 月 14 日に日比谷公会堂で開かれた獨協学園創立 50 周年を記念する演芸会がある。この会では、在日ドイツ人によるドイツ古典劇、映画「制服の処女」上映のほかに、ドイツ歌曲が演奏されたという。『目でみる獨協百年』の 113 頁によればドイツ人教師ザールが、『獨協学園史』の 745 頁によれば黒沢貞子が独唱で出演したとされる。この日の来場者は約 2200 名だったという。

その他にも、獨逸学協会学校や獨協中学の音楽部は公開演奏を行っていただろう。獨協大学が 1964 年に創立されると、管弦楽部が学外のホールを借りての公開演奏会を含む活発な活動を行うようになる。1972（昭和 47）年 6 月 12 日には、第 1 回獨協大学音楽祭が新宿厚生年金会館大ホールで開催された<sup>33)</sup>。文化祭は、学生・生徒の日頃の音楽活動の発表の場として重要である。たとえば、獨協中学・高等学校の 1981（昭和 56）年 10 月 3～4 日の文化祭では、「ピアノ弾き語り、ヴァイオリンリサイタル、吹奏楽演奏、獨協 JAM、81 コンサート、のどじまん大会、ロックハウス、ライブハウス」<sup>34)</sup> という盛り沢山な発表が行われた。

そして、2003（平成 15）年 7 月 5 日、獨協学園創立 120 周年を記念し、ドイツのベルリン・フィルのホルン・アンサンブルが獨協大学を来訪。学内で高校生、大学生を対象とする公開レッスンとコンサートを行った。コンサートでは獨協大学管弦楽部（指揮：西脇秀治）が共演し、ドヴォルザークの《交響曲第 9 番「新世界より」》第 4 楽章を演奏した。この模様はテレビ、新聞各紙で報道された。

---

33) 『百年』、164 頁。

34) 『学園史』、846 頁。



## 部活動

1803（明治 36）年に獨逸学協会学校学友会に音楽部が創立された経緯については、上に述べたとおりである。初めての洋楽管弦楽器を用いた部として、先駆的な演奏活動を行っていた。その後の獨協学園における部活動を、記録からうかがえる限り、追っておこう。

1953（昭和 28）年には、音楽部（部長：新見教諭）は部員数が高校 27 名。「青少年シムフォニーコンサート参加を期して」合唱の練習を行っていた。ハーモニカバンドでの三重奏、四重奏も練習していたようだ。また、部員たちが放送設備を利用し、レコード音楽の解説等を行っていたとのことである<sup>35)</sup>。1958（昭和 33）年の時点では、音楽部（顧問：上林教諭）は、随時レコード鑑賞会を開いて古典から現代までの音楽に親しみ、声楽科出身の上林教諭の指導により、意欲的にコーラスに取り組んでいた。「母の会」から 2 台のピアノを贈られたことにより器楽への関心も深まったようだ。また、「従来、器楽合奏としてはハーモニカ合奏しかなかったが、近々ブラスバンドも創設される予定」とある<sup>36)</sup>。この 1958 年の記録では、新しい音楽系の部として、謡曲部の名前を見いだすことができる。謡曲部は、顧問の生物教師・伊集院兼高教諭が、華族の出（子爵）で、能の喜多流正教授の資格をもっていたことから、伊集院教諭を中心に、謡曲の研究と稽古を行っていたという<sup>37)</sup>。この部は、早稲田大学および跡見女子大学と一緒に練習を行い、演奏会にも参加したそうである<sup>38)</sup>。薄明の生徒、阿部信之（1957 年卒業）が部活動ではじめて謡曲の手ほどきをうけたことが契機で、観世流師範となったという<sup>39)</sup>。

35) 『七十年』、78～79 頁。

36) 『七十五年史』、95 頁。現在の獨協中学・高等学校吹奏楽部は、定期演奏会を行い、コンクールでも賞を得るなど、活発な活動を行っている。

37) 『学園史』の 831 頁の平野健次の文章によれば、伊集院教諭は「生物より謡曲の方を熱心に教えておられたようだ。文化祭には、生徒に舞囃子を舞わせて、ご自身に鼓を打たれたが、その大鼓を付き合わされてしまった」とある。

38) 獨協中学・高等学校の兼田信一郎教諭の 2003 年 10 月 10 日付けの筆者宛の書状に記された情報。兼田教諭には、調査に対するご協力に御礼申し上げます。

39) 『七十五年史』、96 頁。



現在の獨協学園構成校の音楽系の部を下記に挙げる<sup>40)</sup>。

獨協中学・高等学校…吹奏楽部、軽音楽部  
 埼玉獨協中学・高等学校…吹奏楽部、コーラス部  
 獨協大学…管弦楽部、マイスタージンガーズ、マンドリンクラブ、ロック  
 セクション、混声合唱部、ピアノフォルテ・ソシエツテ、MU-  
 SIC COMPANY WITH  
 姫路獨協大学…アコースティック部、軽音楽部、混声合唱団、吹奏楽部  
 獨協医科大学…軽音楽部

## 教員、授業

獨協学園での音楽教育を担当してきた教員を、資料から読み取れる限り、下記に挙げる。

獨逸学協会学校（1883年～）、獨協中学・高等学校（1948年～）<sup>41)</sup>

大村恕三郎…1893～1905（明治26～38）年

東儀鉄笛（本名：季治）…1899～1906（明治32～39）年

東儀俊龍…1906～1915（明治39～大正4）年

東儀俊輔…1933～1937（昭和8～12）年

新見保廣…1937～1944（昭和12～19）年、1946～1955（昭和21～30）年

小山郁之進…1940～1945（昭和15～20）年

安藤仁一郎…1944（昭和19）年<sup>42)</sup>

上杉英雄…1955～1995（昭和30～平成7）年

小山和子…1998（平成10）年～

1953～1958（昭和28～33）年に国語教師をつとめた平野健次は、日本古典芸

40) 2003年11月5日現在の、各校のホームページ上の情報に基づく。

41) この間、獨逸学協会学校中学、獨逸学協会中学校（1937年）、獨協中学校（1947年）と名称の変遷がある。

42) 「芸能教師(音楽)」と記載されている。『資料集成』、228頁。

能・日本音楽史の研究者であり、のちに獨協大学教授も務めた。

1948～1966（昭和 23～41）年に生物教師をつとめた伊集院兼高は、能の喜多流正教授の資格をもつ鼓の名手で、謡曲部を指導した。

教員ではないが、1952（昭和 27）年より理事をつとめた加藤成之は、東京芸術大学音楽学部教授(音楽美学)であった。

#### 獨協埼玉高等学校（1980 年創立）

岸本治夫…1984（昭和 59）年～

#### 獨協大学（1964 年創立）

大学に関しては、『獨協学園史』に記載されているのは役職者のみで、全教員の氏名等が記されていないため、網羅的に挙げることはできない。参考までに、ドイツ語学科開設の「ドイツの音楽」を担当した教員名を下表に挙げる。しかし、これには非常勤講師も含まれる。亡くなる 2003 年春まで「ドイツの音楽」を担当した近衛秀健は、1965 年以来、獨協大学管弦楽部の指導も行った。ドイツ語学科では、ドイツ音楽の研究・教育が非常に盛んだった時期があり、1990 年代前半には、音楽を扱うゼミナール(演習)が同時に 4～5 つ開設されていた。1993 年から専任のバイスヴェンガー助教授 Dr. Kirsten Beißwenger は、国際的なバッハ研究者である。

#### ドイツ語学科開設科目「ドイツの音楽」担当者

1967～1972（昭和 42～47）	年度	安藤熙
1976～1979（昭和 51～54）	年度 <sup>43)</sup>	嶋田俊一
1980～1991（昭和 55～平成 3）	年度	関徹雄
1992～2002（平成 4～14）	年度	近衛秀健
2003（平成 15）	年度	木村佐千子

43) 昭和 48～50 年度分については、獨協大学教務課に講義概要が保管されていないため、担当者を調べるができなかった。調査にご協力いただいた、教務課の本間寛人氏に御礼申し上げる。

本年度、獨協大学で開設されている、音楽関係の授業を下記に挙げる。

全学共通授業科目

- ① 歴史と文化 (III)、人文科学特殊講義 B (イタリア音楽史)  
担当：園田みどり
- ② 人文科学特殊講義 B (イタリアの声楽曲)  
担当：園田みどり

ドイツ語学科開設科目

- ③ ドイツ語講読(芸術) …Heinz Fischer „Das deutsche Volkslied“  
担当：本多喜三郎
- ④ ドイツ語講読(芸術) …オペレッタやミュージカルの台本等  
担当：前田智
- ⑤ ドイツ語講読(芸術) …シューマンの評論  
担当：木村佐千子
- ⑥ ドイツの音楽 …中世から現代に至るドイツ音楽史  
担当：木村佐千子
- ⑦ ドイツ思想・芸術各論 …J. S. バッハのマタイ受難曲  
担当：木村佐千子

フランス語学科開設科目

- ⑧ フランスの音楽 …18～19世紀の歌の詩と音楽表現、19～20世紀のピアノ音楽  
担当：松橋麻利

**卒業生**

主に『獨協学園史 資料集成』中の明治21～昭和38年度の卒業生名簿(1～215頁)をもとに、獨逸学協会学校、獨協中学・高等学校の卒業生、中退者などのうち、音楽関係の職についてと考えられる方々の情報を以下に挙げる。物故者、住所不明者等で、名簿に職業が載っていない卒業生の情報は除く。

明治 34 年中退	本居長世	作曲家
明治 37 年卒業	颯田琴次	医学博士、薬学博士、東大小石川分院耳鼻科部長、東大医学部講師、東京芸大教授(音声学)
明治 41 年卒業	伊藤貞雄	ピアノ教授、音楽家
大正 5 年卒業	益田甫	日本劇場付属舞踊音楽学校主事
大正 6 年卒業	田中信太郎	音楽家(バイオリン)、城南女子短大講師
大正 12 年卒業	濱田武雄	楽器商
大正 14 年卒業	志賀静男	武蔵野音楽学校教務嘱託、小児音楽教室主宰

昭和 4 年卒業	永田哲夫	薬学士、音楽家
	灰田可勝	ハワイアン歌手「灰田晴彦」
	廣瀬文雄	音楽教師(神章)
昭和 11 年卒業	今泉周男	松竹楽劇団
	吉田英男	シャンソン歌手(高英男)。戦後、一世を風靡
昭和 13 年卒業	永田美知雄	音楽家
昭和 16 年卒業	安藤仁一郎	音楽家(ピアニスト)
昭和 20 年卒業	村田昭一郎	東京ヴァイオリン製作学校校長 (無量塔蔵六)
昭和 21 年卒業	秋満義孝	ジャズピアニスト。戦後超一流のミュージシャン
	石川正博	作詞家、富本節家元
	松浦豊明	ピアニスト。戦後現代モダン音楽界の第一人者
昭和 26 年卒業	武田純明	東京フィルハーモニー交響楽団ドラマー
昭和 28 年卒業	浅井英雄	音楽評論家
	鈴木孝男	河合楽器製作所
昭和 30 年卒業	鈴木仙十郎	東芝レコード
昭和 33 年卒業	八田英之	渡辺音楽出版社
昭和 34 年卒業	佐藤則夫	東京音響冷機
	醍醐五郎	福山ピアノ
昭和 37 年卒業	金子保雄	東芝音楽工業
昭和 38 年卒業	佐藤方紀	東芝音楽工業

## 校歌

以下、資料として、獨協中学・高等学校校歌(獨逸学協会学校校歌<sup>44)</sup>、獨協大学校歌、獨協埼玉中学・高等学校校歌、姫路獨協大学学歌、獨協医科大学附属看護専門学校校歌、獨協学園歌を挙げる<sup>45)</sup>。

44) 現行の中学・高校校歌では歌詞が3番までだが、獨逸学協会学校校歌では5番まで書かれている。旋律は同じである。

45) 獨協医科大学には校歌が存在しない。

① 獨協中学・高等学校校歌(獨逸学協会学校校歌の歌詞)

獨逸学協会学校校歌

作詞 芳賀矢一  
作曲 東儀俊龍

- 一、緑は深し城西の  
塵をよそなる目白台、  
学びの花の香も高く  
吾が校立てり巍々として。
- 二、右手にはかざす數島の  
大和島根の桜花、  
左手にかざす西欧の  
月桂樹の花の枝。
- 三、学芸到り極まれる  
獨逸の森の玉桂、  
世に先んじて移したる  
先人の功仰ぎつつ。
- 四、あやに畏しき天皇の  
勅語の旨を櫓權にて、  
学びの海を漕ぎ渡る  
吾等が行手たのもしや。
- 五、ああ七百の健男兒  
仰げ双手の花二枝、  
ああ七百の健男兒  
仰げ理想の花二枝。

校 歌

芳賀矢一 作詞  
東儀俊龍 作曲

Moderato

The musical score is written in G major (one sharp) and 4/4 time. It consists of four staves of music with corresponding lyrics in Japanese. The tempo is marked 'Moderato'.

み どり は ふ か し - じ - せ い の  
ち - り を よ そ な る め じ ろ だ い  
ま な び の は な の - か も た か く  
わ が こ う た て り - ぎ ぎ と し て

- 一、緑は深し城西の  
塵をよそなる目白台  
学びの花の香も高く  
我校樹てり巍々として
- 二、右手には翳す數島の  
大和島根の桜花  
左手に翳す西欧の  
ローレルべールの花の枝
- 三、あ、九百の健男子  
仰げ双手の花二枝  
あ、九百の健男子  
仰げ理想の花二枝

## ② 獨協大学校歌

## 獨協大学校歌

小池辰雄 作詞

萬沢 遼 作曲

あまのはら ふりさけ みつつ  
 さしのぼるひを むねに いだき一て  
 あさかーぜ かーおーる だいちーを あーゆーみ  
 こーぜん のきを つねに やしなう  
 どつきょう がくとの えいしを みよや  
 のりを まもりて じゆうあーり  
 がくを おさめて ひとぞあーる  
 あーけん がくの こころは たかし  
 あーけん がくの こころは たかし

一、天の原ふりさけ見つつ

さし昇る陽を胸に抱きて

朝風薫る大地を歩み

浩然の気をつねに養なう

獨協学徒の英姿を見よや

法を遵りて自由あり

学を修めて人ぞあり

ああ 建学の精神は高し

ああ 建学の精神は高し

二、関東は草加のほとり

沢に白鷺 野へには蓮華

柳の影に筑波は応え

樅の梢に富士の峯映えて

城と聳ゆるわが獨協に

天地を貫く師道あり

昂星燦たる友誼あり

ああ 協同の精神は深し

ああ 協同の精神は深し

三、万国の文化の粹を

大和心に豊かに集め

独創妙えなる業を進めて

世界に雄飛の大志を抱く

わが獨協の学風ゆかし

真理を愛して生命あり

天に即して大和あり

ああ 創造の精神は広し

ああ 創造の精神は広し

③ 獨協埼玉中学・高等学校校歌

# 校 歌

小池辰雄 作詞

岸本治夫 作曲

Moderato

み はるかす つくばねのあ さ ひか げ わ  
 が まな び や に て り は え て そ う  
 ぞ う の ひ か り も ゆ ー る か な あ  
 あ どつきよ う さ い た ま わ が ほ こ う

## 校 歌

作詞 小池辰雄  
作曲 岸本治夫

一、みはるかす筑波嶺の朝陽光  
 わが学舎に照り映えて  
 創造の光燃ゆるかな  
 ああ 獨協埼玉わが母校

二、君見ずや青春の学友の影  
 学びの城にたゆとうて  
 信愛の結びあつきかな  
 ああ 獨協埼玉わが母校

三、天地に満ちわたる正大の気  
 わが学園にみなぎりて  
 開拓の力あふるるかな  
 ああ 獨協埼玉わが母校



## ④ 姫路獨協大学学歌

## 姫路獨協大学学歌

安水 稔 和・作詞  
中村 茂 隆・作曲  
(March, 1987)

♩ = 92  
p ゆったりと



つち あ た た か い は り ま の に ゆ れ  
キ ノ ウ ノ フ ク テ ラ ヌ キ ス テ テ ア ス  
ひ か り あ ふ れ る せ と の う み わ た

元 気 よ く  
は す ん で

mf



る し げ み を お し わ け て ひ る  
ノ ノ ソ ミ ラ ム ネ ニ ダ キ キ ヨ ウ  
る し お か ぜ せ に う け な み

※「アイトキ」の「イ」はA音で



が る み ち を ふ み し め る か わ ら な い も の か わ る も の ひ  
ノ コ コ ロ ヲ ウ タ イ ダ ス ウ ツ ク シ イ ト キ ア イ ノ キ ヒ  
う つ お も い に ぎ り し め は る か な せ かい と お い そ ら ひ

※「ハググミ」の「ク」はD音で

だ ら か に



た す ら に ひ た す ら に み つ め  
た す ら に ひ た す ら に ハ グ ク  
た す ら に ひ た す ら に ゆ め み



て  
ミ て

## 1. 土温かい 播磨野に

揺れる茂みを 押し分けて  
拡がる道を 踏みしめる  
変らないもの 変るもの  
ひたすらに ひたすらに 見つめて

## 2. 昨日の服を 脱ぎ捨てて

明日の望みを 胸に抱き  
今日のころを 歌い出す  
美しい時 愛の時  
ひたすらに ひたすらに 育くみ

## 3. 光溢れる 瀬戸の海

渡る潮風 背に受けて  
波打つおもい 握りしめ  
はるかな世界 遠い空  
ひたすらに ひたすらに 夢みて

⑤ 獨協医科大学附属看護専門学校校歌

獨協医科大学附属看護専門学校校歌

作詞作曲 馬場廣太郎  
編曲 富田 英也

み どり な す  
み ぶ の だ い ち こ そ あ た た か  
し ん り も と め て  
わ れ ら つ ー ど う い の ち の し ん び き  
わ ー め ん と と わ に つ づ く ひ と す じ の み ち  
あ あ ー ど つ き よ う か ん ご の ま な び  
や

獨協医科大学

附属看護専門学校

一、緑なす 壬生の大地こそ あたたかし

真理求めて 我等集う

生命の神秘 究めんと

永遠に続く 一筋の道

ああ 獨協 看護の学舎

二、仰ぎ見る 男体の山は ゆるぎなし

愛を求めて 我等集う

生命の輝き 心に満ちて

若き力は 無限の希

ああ 獨協 看護の学舎

三、霞みたる 望む富士の山 静かなり

理想求めて 我等集う

生命の重さ 願いはひとつ

世界にとどげ平和の祈り

ああ 獨協 看護の学舎

## ⑥ 獨協学園歌

獨協学園創立100周年記念

## 学 園 歌

錦野俊一 作詞

毛塚幸朗 作曲

Moderato



1. めろが おかに わーこう どつど いてふん  
2. せいきの でおんとう けうつどそだてくまこ  
3. よもには ばたき きゆうじまうそあつくまま

か の い ぶ き は な さ か せ ん と し  
と の け じ き り そ う に も だ え き て て じ だ  
び の し お し え ー む に い い た ち た る } わ  
い の を き が い い ふ る い た ち た る } わ  
い の を き が い い ふ る い た ち た る } わ

ら が ど っ きょう わ れ ら が ど っ きょう

一、目白が丘に 若人集い

文化の息吹き 華咲かせんと

進取の気概 奮い立ちたる

※われらが 獨協

二、世紀の伝統 受け継ぎ育て

誠実の健児 理想にもえて

次代を担い 雄々しく進む

※われらが 獨協

三、四方に羽ばたき 友情篤く

学びし訓え 胸に懐きて

世界をむすび 未来に伸びる

※われらが 獨協

（※印くり返し）

## 最後に

総合ドイツ語の2003年度春学期末口頭試験の際、趣味に音楽演奏を挙げる学生が非常に多いことに気づいた。音楽鑑賞にとどまらず、積極的に音楽演奏を行っている学生がドイツ語学科には多いわけである。ドイツの音楽に関心があり、ドイツ語学科進学を決めたという学生も多い。日本人にとって、——非常に若い世代にとっても——ドイツ、あるいはドイツ語と音楽が密接に関わっていることを改めて認識した。

現在、大学における教養教育のあり方が問題となっている。教養だけで生計を立てていくことはできないが、各自の世界を広げ、心を豊かにすることができる。この意味で、狭い専門のみに偏らない教養教育は、今後ますます重視されていくことであろう。特に、獨協大学では、正門近くの石碑に掲げられている創立者・天野貞祐の言葉「大学は学問を通じての人間形成の場である」のとおり、細分化された専門教育より、基礎学力や教養に裏打ちされた信頼できる人間の育成に重点を置いている。音楽も教養教育の一環として、学生諸君の人間形成に寄与することができればと思う。なかでも、ドイツ語学科では、音楽に対する関心という素地があり、これを効果的に行うことができるのではないだろうか。また、対外的にも、2003年7月のベルリン・フィルのホルン奏者たちを招いた本学のコンサートに2000人近い来場者があったことから、音楽に関わる企画を出していくことが地域社会に期待されていると考えられる。明治期の獨逸学協会学校における音楽面での先駆的な業績に思いを馳せつつ、さらなる飛躍を目指したい。

# Dokkyo-Gakuen und die Musik

Sachiko KIMURA

In diesem Beitrag wurde erläutert, wie sich Dokkyo-Gakuen, ein Komplex von zwei Gymnasien und drei Universitäten, seit der Gründung bis heute mit Musik beschäftigt hat. Mit dem Ziel, die deutsche Kultur in Japan zu verbreiten, wurde 1883 das erste Dokkyo-Gymnasium gegründet. In der Meiji-Zeit, in der die westliche Musik erstmals in Japan eingeführt wurde, spielte das Dokkyo-Gymnasium eine führende Rolle. Es hatte zum Beispiel den ersten Musikklub, der mit europäischen Musikinstrumenten wie Violinen und Flügel usw. ausgestattet war (seit 1903). In der Kriegszeit 1931–1945 hatte das Gymnasium Kontakte mit Deutschland im Bereich der Musik; beim Besuch der Hitler-Jugend zum Beispiel sangen die Schüler deutsche Nationalhymne, oder zusammen mit den deutschen Kindern, die in Japan wohnten, sangen die Dokkyo-Schüler deutsche und japanische Gesänge. In Dokkyo-Gakuen wird heute Musik nicht nur unterrichtet, sondern die Schüler und Studenten entfalten selbst in verschiedenen Musikklubs aktiv ihre musikalischen Fähigkeiten. Um über diese Aktivitäten eine Übersicht zu geben, sind folgende Listen und Abbildungen beigelegt:

Liste der Musikklubs heute

Liste der Musiklehrer seit der Gründung

Liste der Vorlesungen über Musik an der Dokkyo-Universität 2003

Liste der Absolventen, die von Beruf Musiker sind oder waren

Notenbeispiele der Schulhymnen